

## 語り手の魔法

—キャサリン・アン・ポーターの“Magic”—

武田千枝子

Katherine Anne Porter の “Magic”<sup>(1)</sup> を含む彼女の最初の短編集 *Flowering Judas and Other Stories* が 1930 年に出版されたとき、この小品に言及した書評はほとんどなかった<sup>(2)</sup>。語数わずか 1200 ほどの、ポーターの作品の中でも最も短いものの一つであるとはいえ、この作家が、納得のいく形になってはじめて作品を発表する完全主義者であること、彼女が新しい南部の “symbolic naturalism” の伝統につらなる作家であって<sup>(3)</sup>、いかにささやかな、一見、平板な作品であっても、そこには、より大きな時間と空間の広がり为背景に、苦悩に満ちた人生が描き出されていること、そして彼女自身が書いているように、この短編集に収録されている作品が “fragments of a much larger plan which I am still engaged in carrying out”<sup>(4)</sup> であることを考え合わせるなら、小品であるが故に深味のない、評価に値しないものとしてこれを斥けることは、今日ではもはや適正な評価とはいえない。ポーターの作品の基本的なテーマを見定める試みがなされるにつれて、この作品は彼女の文学の規範から必ずしも外れるものではない、という見方が確立され<sup>(5)</sup>、その上でこの作品の深部に迫ろうとする分析が試みられているのが現状である。

“Magic” はポーターに最も大きな影響を与えた作家の一人である

Henry James が、小説家として円熟した技量を発揮した中期に好んで用いた nouvelle 形式の作品がそうであるように、economical な作品である。そのジェイムズの中編形式についての Richard P. Blackmur の定義——“ a small reflector capable of illuminating or mirroring a great deal of material”<sup>(6)</sup> は、“Magic”をはじめ彼女の簡潔な様式の作品の性格を最もよく説明していると言えるだろう。極度に切り詰められた“Magic”の舞台の上で作者が密度の高いドラマの構築に成功したのは、聞き手を舞台の上に引きずりあげての一人称の語り手による劇的独白の使用による<sup>(7)</sup>。多くの批評家は、この手法についてその特異性を指摘し<sup>(8)</sup>、「ジェイムズ風の」<sup>(9)</sup>あるいは「皮肉な」<sup>(10)</sup>とのみ言及するだけにとどまり、そのことから生じる効果についての詳細な分析を行っていない。しかし、作品解釈のポイントは、この方法の必然性を明らかにすることにある。

従来のこの作品に対する解釈は、多くの場合、語り手の語る話に焦点を合わせたものであった。語り手と聞き手の役割は考察の対象となることは少なく、たとえ対象となっても、補助的なものとしかみなされていなかった。語り手と作品の枠組みにこそ注目すべきであるという指摘がみられるようになったのは1970年代に入ってからのことである<sup>(11)</sup>。そのような視点からこの作品を分析することによって初めて作者の意図を掘り起こすことが可能になる。この作品は語り手と彼女の話、そしてそれに耳を傾けて反応を示す聞き手という三つの要素の微妙なバランスの上に成り立っているからである。この小論は、中心とみられている内枠の話そのものだけでなく、この作品の外枠である、その話が語られる状況にこそ注目すべきであるという立場から、語り手の用いる言語および語り口に光を当て<sup>(12)</sup>ながら、この作品の意味を明らかにし、かつポーターの作品の総体の中での位置付けを試みようとするものである。

“Magic”の語り手は、かつて召使いとして働いていたニューオーリンズの売春宿で見聞したことを現在の女主人 Madame Blanchard に語って聞かせる。Ninette はその売春宿で一番の売れっ子であるが女主人と極めて折り合いが悪い。ニネットと、彼女の給料から不当に利益を絞り取ろうとする女主人との間ではいざこざが絶えず、たまりかねて口汚く抗議するニネットに女主人は暴力を振う。ひそかに貯えた金を持って出て行こうとするニネットと、彼女を泥棒呼ばわりする女主人との間で血をみる騒ぎが繰り広げられ、遂に殴り出されたニネットは破れた衣服のまま去って行く。執拗に彼女の居所を探り出そうとする客を誤魔化しきれなくなった女主人は、黒人の料理女の助言で彼女を呼び戻すためにその土地の黒人女性の間で行われている魔法を彼女にかける。果たして料理女の予告通り、逃げた売春婦は女主人のもとに戻って来て従順にその命令に従い、以後、波風を立てることはなかった。

ニネットのエピソードにおいて注目される点は、女主人と彼女との対立である。ふたりの女性は雇用者と使用人として主従関係にあり、社会的身分において対立している。二人の間には“a true hatred”<sup>(13)</sup>が生じていて感情面でも対立する存在である。女主人のニネットに対する支配は金銭と暴力によるものだけではない。“full understanding with the police”<sup>(40)</sup>と男友達の助力を確保している女主人は、この売春婦にとって不可抗力を意味する。女主人の力の網に包囲された彼女が、“thin”<sup>(39)</sup>で“well-liked by all the men who called”<sup>(39)</sup>であることは、彼女の無力な愛らしさを示している。それは、名前を与えられずに“the madam”とだけ表わされている女主人に対して、この売春婦が grace を意味する Ann(a) の愛称で呼ばれていることによっても明らかである。

ニネットを売春宿に拘束しておく力は、ひとり女主人と彼女の体現する

語り手の魔法（武田）

力だけではない。女主人が彼女に魔法をかけるきっかけとなった男客の要求と売春宿の外の世界もまた彼女の脱出の試みを失敗に終らせる要因となっている。女主人が売春婦を斡旋することによって客の欲求を満足させ、自らの利益をあげる社会の仕組みがニネットのような女性を必要としているのである。次の引用は戻って来た彼女に対する客と女主人の反応である。

One of the men said, Welcome home, Ninette! and when she started to speak to the madam, the madam said, Shut up and get upstairs and dress yourself. (41)

両者の自己本位の反応は、この世界でのニネットが彼らの利己的欲望の道具に過ぎないことを示している。それにも拘らず、彼女が女主人の命令通りに行動するのは、彼女が外の世界で得た認識のためである。

Then in seven nights the girl came back and she looked very sick, the same clothes and all, but happy to be there. (41)

売春宿の関係者は、魔法の力によって彼女が戻って来た、と信じていることは確かであるが、出て行ったときと同じちぎれた衣服を身につけた、元気のないその姿は、たとえ暴力や搾取からは自由になりえたとしても、別の世界で物心両面の平穏な生活が保証されるとは限らないことを思い知らされた彼女が、自分に定められた場所として元の職場へ戻らざるをえなかったことを示している。搾取につながる労働ではあっても、歓迎してくれる客がある限り従わざるをえない、と彼女は諦観するのである。女主人の催促に対して彼女が口にしたという返事——“I'll be down in just a minute.” (41) が一層哀れに響く。

ニネットのエピソードには、隷属状態にある者が脱出と独立を試みながら、これを阻止する力の前に敗れ、諦めのうちに自己の運命に従うという

行動のパターンがみられる。このパターンはポーターのほとんどすべての作品を支えているもので、家族、権威、伝統そして過去の価値観の束縛から逃れようと苦闘する Miranda の物語や Johnson の分類による彼女の六つのテーマの一つ、“man’s slavery to his own nature and subjugation to a human fate which dooms him to suffering and disappointment”<sup>(14)</sup> に属する作品はその最も顕著な場合である。しかし、“Magic” の内枠であるニネットのエピソードのテーマが自己の運命への隷属であることを明らかにしただけで語り手と聞き手の役割を無視すれば、これはニューオーリンズの珍しい話<sup>(15)</sup>として、語り手の言葉を文字通りに受け取るなら、女主人の（そして読者の）退屈しにぎに語られるスリルに富む話に過ぎなくなる。この小品はこの作家に固有のテーマに地方色の彩色を施したただけのものなのであろうか。

ニネットのエピソードは一人称の語り手によって彼女の女主人に向かって語られている。仮に聞き手を登場させずに語り手が直接読者に向かって語る形式であれば、聞き手に関する部分を一切、省いた、ニネットについての生々しい描写が読者の心を捉えるであろう。しかし、語り手と読者の間に反応を示す聞き手が介在することによって読者に伝えられるのは内枠である語り手の話と、語り手と聞き手から成る外枠の世界の状況という二重の枠組をもつ世界となる。そこでは語られる事柄だけでなく、語り手の語り口が聞き手との関連で、より一層、重要なものになってくる。

“Magic” の一人称の語り手は、ニネットについての一連の出来事を外側から「見た通りに」語る。このタイプの一人称の語り手の言葉というものは生気に満ちているが、その中には恣意性も潜んでいる<sup>(16)</sup>。その語り口は、自分自身について語ることの少ないこの一人称の語り手を理解する唯一の鍵であるから、恣意性は負の価値から一転して重要な鍵となる。読

## 語り手の魔法（武田）

者は語り手の説明がニネットに関する事実であるのか、それとも彼女の創作であるのか判断する根拠を持たない。しかし、読者にとっては、与えられた語り手の解釈こそ唯一の真実なのである。一人称小説に内在する“the terrible fluidity of self-revelation”<sup>(17)</sup>のために、それは我々に語り手の性格やニネットの事件に対する彼女の姿勢、そしてその事件を語る彼女の真の目的などの重要な点を雄弁に語っているからなのである。

用いられる言葉と声の調子だけから語り手について読者が多くを知るように、聞き手についても語り手の話とその合間に二回、挿入される反応の説明から、読者は必要な知識を得ることができる。従って、二つの枠が相似であることには誰しも気付く。両者ともに主従関係にある二人の女性から成るといふ構造上の類似に加えて、双方の女主人の性格も冷酷で無情である点が共通している<sup>(18)</sup>。両者の間の重大な相違点は、外枠の主従関係に皮膚の色の違いから生じる人種間の競争意識が絡まっていることである<sup>(19)</sup>。このため、語り手とマダム・ブランチャードとの関係は、内枠の関係より一層複雑な性格を帯びたものとなっている。語り手が黒人であることに読者が気付くのは、彼女の話が半分以上進んだ後の段階である。売春宿の黒人の料理女について説明する箇所では彼女は自身についても語っている。

For the cook in that place was a woman, colored like myself,  
like myself with much French blood just the same, like myself  
living always among people who worked spells. (41)

語り手は黒人とフランス人の血を受け継いだニューオーリンズのクリオール (Creole) である。Madame Blanchard の名前が示すようにフランス系の白人である女主人と血筋の上では匹敵しうることを彼女はそれとなく相手に知らせようとしているのである。ここに被支配者の支配者に対するラ

イバル意識をみることができる。語り手のこの意識は、彼女がニネットの話を進める過程で各所に皮肉な表現となって現われている。具体的な例については、語り手の真の目的についての考察の際に検討することにする。

外枠をなす語り手と女主人との冷たい関係はあからさまには述べられていない。それは極めて巧妙に、暗示的に語られているに過ぎない。作品冒頭の導入部で語り手は

And, Madame Blanchard, believe that I am happy to be here with you and your family because it is so serene, everything, .... (39)

とマダムに語りかけていて、平穏な生活に恵まれているようにみえる。また、彼女が現在は恵まれた状態にあることをマダムに信じ込ませようとしている。しかし、彼女の話の結末で、可能な限りの抵抗の果てに止むなく戻って来たニネットについて彼女は同じように“... she looked... happy to be there.”と述べているのである。ニネットにとってはそこに戻る以外、道はなかったのである。この同じ語句の繰り返しは語り手自身の現在についての意図的な暗示、即ち“I work always where there is work to be had...”(39)と述べられているように、使用人の身分と定められた境遇の彼女にとっても、現在の生活は次善のものでしかないことを暗示している<sup>(20)</sup>。従って、内枠の話にある女主人と折り合いの悪いニネットへの言及は、彼女自身の女主人との折り合いの悪さについての暗示と解される。語り手の次の言葉は女主人の性格を言外にほめかしている。

You'll excuse me too but I could not help hearing you say to the laundress maybe someone had bewitched your linens, they

fall away so fast in the wash. (39)

マダム・ブランチャードは使用人の仕事振りに厳しい監視の目を光らせる嫌味な女主人である。John Edward Hardy はさらに踏み込んだ解釈を示して、語り手が洗濯婦に対する女主人の小言の中に“a genteel version of the brothel madam’s abuse of her whores”を見て取ったと述べ<sup>(21)</sup>、二人のマダムが本質的に何ら変らぬ存在であることを指摘した形である。また、彼女がシーツの傷み具合を魔法のせいに行っているらしいことは、この地方の黒人女性が行う魔法に対して白人女性であるマダム・ブランチャードが不快感を抱いていることを示している。従って、魔法をかける黒人の中で暮らしてきた語り手に対しても、彼女は同じ感情を抱いているとみられる。このようにマダム・ブランチャード (Blanchard) はその名の示す通り、白人意識をひけらかす、冷たい女性としての輪郭を現わしてくるのである。

語り手によれば、ニネットのエピソードを語るのは、髪にブラシをあててもらっている間の女主人の無聊を慰めるためである。次の引用は、エピソードに入る前の彼女の説明である。

And, Madame Blanchard, believe that I am happy to be here with you and your family because it is so serene, everything, and before this I worked for a long time in a fancy house—maybe you don’t know what is a fancy house? Naturally... everyone must have heard someitme or other. Well, Madame, I work always where there is work to be had, and so in this place I worked very hard all hours, and saw too many things, things you wouldn’t believe, and I wouldn’t think of telling you, only maybe it will rest you while I brush your hair. You’ll excuse me too but I could not help hearing you say to the



laundress maybe someone had bewitched your linens, they fall away so fast in the wash.(39)

語り手は、女主人が売春宿について知らない筈はないと思っているが、彼女に向かっては、そのような卑しい汚れた場所<sup>(22)</sup>のことは知らないだろう、と言って彼女の優越感を満足させている。同時に語り手は、白人の上流階級の婦人で清浄、純粹を意味する名を持つ女主人には到底、信じられないような、そして聞かせられないような特殊な社会の事柄についての知識と経験を持ち合わせていることを述べて自身を卑しめながら、世俗的知識の豊富さをひそかに誇示している。彼女はニネットと同じ被支配者階級に属しながら、彼女に同情を寄せるところか、女主人の搾取も “... it is a business, you see, like any other...” (39) と割り切る現実主義的な見方を身につけたしたたか者<sup>(23)</sup>であるから、世間知らずのマダムに対してその点で優位に立つのは容易である。次いで語り手は、彼女が洗濯婦への小言を立ち聞きしたことを知った女主人が腹を立てないように下手に出ながら最も重要な言葉、即ち彼女が見聞した多くの事柄の中で特にニネットの話をする気になった理由を述べる。語り手は女主人の小言の中に魔法への関心、とりわけ不快感を察知したのである<sup>(24)</sup>。そこで語り手は故意にニネットの話を持ち出す気になったのである。彼女はその話が女主人を慰めるところか苦しめるものとなることを知っていた筈である。George Hendrick はポーターの評伝の改訂版において、メイドが女主人に “... only maybe it will rest you while I brush your hair.” (39) と言ったとき、その言葉には「悪意がこめられて」いたであろう、と書いている<sup>(25)</sup>。この冒頭の部分にみられるように、語り手の用いる語句は皮肉で両義的である。彼女は巧みに真意を隠して目的を達成することを企てている。

語り手の真の意図が冷酷な女主人への報復であることは、彼女の話の中

## 語り手の魔法（武田）

に散りばめられたコメントと女主人への呼び掛け、そして女主人の示す反応によって計ることができる。語り手は彼女の話が聞き手に与える反応を見逃すことなく、話をコントロールしているふしがある。ニネットを虐待する女主人の暴力の一部始終を語ってきた彼女は“...I don't repeat all, you understand it is too much.”(40)と言葉をはさむ。恐ろしい場面がまだあることをほのめかしながら相手に与えた効果を見定めているのであるが、彼女は話を中断するどころか

And now, Madame Blanchard, if you wish to hear, I come to the strange part, the thing recalled to me when you said your linens were bewitched.(40-41)

と語りかけて、彼女の嫌悪する魔法に話が及んできたことに相手の注意を向けて好奇心をあおる。冒頭から彼女の話の前半にあたるこの段階までの間に、語り手の女主人への呼び掛けは五回あり、そのうち三回がニネットの話に入ってからのものである。上の引用に先立つ二例はニネットと女主人との間の暴力シーンを語る箇所であり、特に二回目は女主人がニネットの急所を蹴ることを話すときである。これら三回の呼び掛けはいずれも話のすさまじさを相手に強く印象づけるためのねじのひと巻きの効果を持つ。

ニネットに対する暴力と魔法について詳細に語る語り手に顕著なことは、不浄なものを表わす語句の多用である。話の前半で用いられる表現——ヘンドリック<sup>(26)</sup>によれば性病を意味する“sick”, “her most secret place”, “blood”(40)、また後半の魔法に関する部分では、混合剤を調合するのに用いられる汚物類として“the chamber pot”, “the hair from her brush”, “little bits of her nails”, “the sheets with her blood”, そして“...the madam spat...”(41)——これらはすべて白色、清浄、

純粋を意味する彼女の名 Blanchard とは相容れない事物である。これに対するマダムの反応は、彼女が受けた衝撃の大きさを示している。彼女の反応は前述の通り僅か二回しか示されていないにも拘らず、このことを証明するのに十分である。引用は最初の反応が示される箇所である。

...and so the girls stayed on unless they were sick; if so, if they got too sick, she sent them away again.

Madame Blanchard said, "You are pulling a little here," and eased a strand of hair: "and then what?"(40)

語り手は、病気にかかった売春婦が暇を出される話をしてマダムの髪を強く引っ張ったのである。おそらく彼女は“sick”の語に力を入れ、役に立たない女を解雇する女主人の冷酷さを強調したのであろう。彼女はそれによって自分の女主人の冷酷さを暗示したのである。しかしこの際の彼女の反応は、相手の意図に気付いたかどうかを明確には示していない。それは髪を引っ張る召使いに抗議する形で間接的に示されている。直接的な反応は強い好奇心だけである。しかし、後述する二回目の反応も故意に控え目に示されていることを考えれば、彼女が衝撃を受けた、と判断するのが妥当であろう。二回目の反応はニネットにかけられた魔法の話が一段落した所で示されている。

Madame Blanchard closed her perfume bottle with a thin click: "Yes, and then?"(41)

彼女はニネットの運命について、魔法の効力について尽きない好奇心を示す一方で、香水瓶のふたを「そっと」閉めている。ここで彼女が香水を用いたのは、語られた不潔な事柄の衝撃を和らげるためである<sup>(27)</sup>ことは明らかである。心身の清潔を保つ意味の髪の手入れの場で、そのことと対立

## 語り手の魔法（武田）

する汚物に満ちた不浄の世界が生々しく描き出されたのである。だが、彼女が「そっと」閉めたということは、その話から受けた衝撃の大きさを語り手に悟られないようにするためだと考えられる。したたかな語り手がこれを見逃す、或いは聞き逃す筈がない。彼女は女主人の動揺を見て取った。彼女は心中、女主人に対して勝利感を抱いている。暗示的な提示の初回の反応の場合と同様、ここに二人の女性の間の目に見えない攻防を読み取ることができる。最後のパラグラフ全体の調子が、それまでのむさくらしい世界の強烈な描写に比較して穏やかなものに変化しているのは、語り手が女主人に対して所期の目的を達成することができたとの認識を得たことを示している。このように解釈すれば、ヘンドリックが“a fairy story”のような結末<sup>(28)</sup>とのみ言及した最後のセンテンス——“And after that she [Ninette] lived there quietly.”(41) も、語り手の話の流れのなかで違和感なくその位置を占めることが可能となる。彼女の穏やかな調子の底には、この売春婦と同様、使用人としての運命からのがれることが不可能である以上、運命に従わざるをえないという諦観が勝利感と混じり合って流れていることは言うまでもない。

ニネットの抵抗は女主人の強固な包囲網に敢然と立ち向かう勇氣ある行動となって現われる。語り手のマダムに対するそれは、彼女に苦痛を与える不快な言葉の暴力という形をとっている。語り手が魔法をかけられたニネットの話をすることは、マダムに魔法をかけることに等しい効果を生む<sup>(29)</sup>。彼女はその話に苦痛を覚えながらもすっかり魅せられ、語り手の意のままになっている。元来、黒人女性が夫を連れ戻すために用いる魔法がニネットを呼び戻して従順にさせたように、語り手の魔法が厳格で冷酷なマダムを完全に支配してしまう。彼女が洗濯婦に嫌味な小言を言ったという箇所は、この意味で重要である。彼女の名 Blanchard はヘンドリッ

クが指摘するようにリネンの布地を意味する語<sup>(30)</sup>であるから、リネンのシーツに魔法をかけることは、マダムに魔法をかけることに等しい。語り手は売春宿の料理女と同様、魔法をかける人々の中で暮らしていたのである。

不浄な語句の多用により白いリネンのマダム・ブランチャードに魔法をかけて汚すことは、被支配者である語り手になし得る唯一の抵抗であり、報復である。この抵抗について注目すべき点は、すでに例をあげて示したように、ニネットの事件の細部については過激な言葉をいながら、その他の部分では、特に冒頭の部分にみられるように、両義的で曖昧な表現を多用していることである。この暗示的な語り口は、黒人使用人という語り手の社会的地位、境遇に関係がある。それは、圧倒的な力を誇る支配者階級に向かってあからさまに抵抗することを彼らに控えさせずにはおかないものなのである<sup>(31)</sup>。彼らが間接的で暗示的な抵抗を効果的なものにしようとすれば、この語り手がみせる知能的な抵抗<sup>(32)</sup>によらなければならない。たとえ彼らの境遇がそれによって改善されるという実質的勝利からは程遠いものではあっても、それは、ある面で白人を圧倒したという精神的満足感をもたらしてくれるからである<sup>(33)</sup>。

ポーターの作品に登場する黒人の数は少なく、しかも脇役として、また類型的にしか<sup>(34)</sup>扱われていない。それは、彼女の幼少時に、身近に黒人の召使いがいなかったこと<sup>(35)</sup>が一因と考えられる。その中では、ミランダものの“The Journey”と“The Leaf”に登場する Aunt Nannie, “The Witness”の Uncle Jimbilly, そして“The Circus”の Dicey がその個性と役割において注目に値する。

ナニーばあや、ジムビリーじいや、そして子守のダイシーに共通していることは、彼らが白人に仕えながら常に自由と独立を、そして自己確立を希求している点である。その人生の大半を女家長である Sophia Jane に寄

語り手の魔法（武田）

り添って自己主張せず、何の不満も抱いていないようにみえたナニーは、女主人の死後、自分の家を持ちたいと言う。そして白人の都合で夫として与えられたジムビリーとも離れて独立する。

The children, brought up in an out-of-date sentimental way of thinking, had always complacently believed that Nannie was a real member of the family, perfectly happy with them and this rebuke, so quietly and firmly administered, chastened them somewhat.<sup>(36)</sup>

子供たちにとって最後の拠り所であるナニーの独立は白人家族への報復であるが、それはあくまでも“so quietly and firmly”に行なわれたのである。ジムビリーは奴隷時代の虐待行為を独り言のように話す。彼はどんなことにも腹を立ててミランダ姉弟をおどかすが実行はしない。彼の抵抗もまた的を直接射るものではない。ダイシーはサーカス見物の途中でおびえて泣き出したミランダのために楽しみを台無しにされて、すっかり不機嫌になってしまう。彼女に許される範囲での抵抗を示してミランダの身体を引っ張るようにして連れ帰る。しかし、サーカスの夢を見てうなされるミランダに夜も付き添わなければならなくなった彼女は、いつものやさしい声で“Now you jes shut yo eyes and go to sleep. I aint going to leave you. Dicey aint mad at nobody... nobody in the whole worl...”<sup>(37)</sup>と語りかけるのである。ダイシーの哀しい諦めは、最後に穏やかな調子に変わった“Magic”の語り手に最も近似している。それは自己の運命に従いながら、ささやかな抵抗を試みる“Magic”の語り手の中に予告されていたのである。

ポーターの作品に登場する黒人は、彼女が描く白人の特質である自己確立への強い欲求を内に秘めている。作者の分身であるミランダの祖母ソフ

ィア・ジェインの“the black shadow”<sup>(38)</sup>とナニーをみるハーディは、自伝的色彩の薄い“Magic”においてのみ、作者は黒人女性に自己を重ね合わせている、と指摘する<sup>(39)</sup>。そうした作者自身の姿勢は支配者階級としての白人の優越感を示すものである。それにも拘らず作者が同じ特質を白人と黒人に共有させたのは、自由を希求して挫折する運命は、制約の多い環境の中で自己の運命に従わなければならない黒人によって最も凝縮した形で描き出されることを知っていたからである。

この作品の語り手はニネットのエピソードのもつこの作者に固有のテーマをより強固な奥行きのあるものにしてている。作者はニューオーリンズで採集したエピソードを主題と方法の両面において完全に自己の世界の中に取り込んでいる<sup>(40)</sup>。内枠は作品の中心のように見えながら、実は暗示的にしか提示されていない外枠を照射する役割を演じていて、中心はむしろ外枠にあるというこの皮肉な構成は、逃れようにも逃れることのできない語り手の皮肉な運命の暗示的な提示のためのものなのである。“Magic”は小品であるが、ポーターの中心的な主題を容れるにふさわしい、周到な計算のもとに構成された精巧な作品である。

#### 註

- (1) “Magic”は *transition* (Summur 1928) に初めて発表された。
- (2) Cf. Robert F. Kiernan, *Katherine Anne Porter and Carson McCullers: A Reference Guide* (Boston: G. K. Hall, 1976), pp. 1-2.
- (3) John M. Bradbury, *Renaissance in the South* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Pr., 1963), p. 70.
- (4) “Three Statements about Writing,” *The Collected Essays and Occasional Writings of Katherine Anne Porter* (New York: Delacorte Pr., 1970), p. 457. 1940年版の *Flowering Judas and Other Stories* に付された序説の一部であるこの引用句中の“a larger plan”は必ずしも唯一の長編 *Ship of*

語り手の魔法 (武田)

*Fools* (1962) だけを指すととる必要はないのではないか。むしろ、彼女の作品の総体を意味するものと解釈するのが適当であると考えられる。この長編も作者の最初の計画では中編にするつもりであったということである (Barbara Thompson, "An Interview (1963)," *Katherine Anne Porter: A Critical Symposium*, ed. Lodwick Hartley and George Core (Athens: Univ. of Georgia Pr., 1969), p. 23)。

- (5) 一例を示せば、Harry J. Mooney, Jr. は、この作品がポーターの他の作品と大いに異なるとみたが (*The Fiction and Criticism of Katherine Anne Porter* (Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Pr., 1967), p. 50), ポーターの作品を貫くテーマを "the rejection theme" とみる William L. Nance は、この作品の内容と技法の両面での特異性を指摘しながらも、これを彼女の作品の主流に属するものとして位置づけている (*Katherine Anne Porter: The Art of Rejection* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Pr., 1963), p. 15)。
- (6) *The Art of the Novel: Critical Prefaces by Henry James* (New York: Charles Scribner's Sons, 1934), p. xxvi.
- (7) ポーターは初期の作品においてすでに語りの方針に関する多彩な実験的試みを行なっている。William L. Nance は "Magic" を初期の実験的なアプローチの最右翼に挙げている (*Katherine Anne Porter: The Art of Rejection*, p. 15)。“Magic” と同じ時期の作品では、間接話法と描出話法だけによって日常生活における際限のない夫婦間の感情のもつれを描く “Rope” (1928) と、のちに *Pale Horse, Pale Rider* (1939) において大規模に用いられる「意識の流れ」手法を取り入れた “The Jilting of Granny Weatherall” (1929) が注目に値する。
- (8) 註(5)参照。
- (9) George Hendrick, *Katherine Anne Porter* (New York: Twayne Publishers, 1965), p. 83; Enrique Hank Lopez, *Conversations with Katherine Anne Porter: Refugee from Indian Creek* (Boston: Little, Brown and Co., 1981), p. 128; Darlene Harbour Unrue, *Truth and Vision in Katherine Anne Porter's Fiction* (Athens: Univ. of Georgia Pr., 1985), p. 64.
- (10) Nance, *op. cit.*, p. 15.
- (11) この立場からの綿密な分析としては以下のものがある。John Edward Hardy, *Katherine Anne Porter* (New York: Frederick Ungar, 1973), pp. 41-44; L. Yosha, *The World of Katherine Anne Porter* (Ann Arbor,



- Michigan: Univ. Microfilms, 1977), pp. 137-141; Helen L. Leath, "Washing the Dirty Linen in Private: An Analysis of Katherine Anne Porter's 'Magic,'" *Proceedings, Conference of College Teachers of English of Texas*, 50 (Sept. 1985), 51-58.
- (12) 従来、語り手の語り口についての考察はほとんどなされていないといってよい。僅かにナンスが "the detachment of the glib, callous narration" (*Katherine Anne Porter: The Art of Rejection*, p. 16) と指摘しているのと、ハーディが作品の冒頭と結末部分に用いられている同じ語 "happy" にこめられた語り手の意図を読み取っている (*Katherine Anne Porter*, p. 43) だけである。
- (13) "Magic," *The Collected Stories of Katherine Anne Porter* (New York: Harcourt, Brace and World, 1965), p. 40. 以下、同書からの引用には、本文中の引用箇所の上に頁数のみを記す。
- (14) James William Johnson, "Another Look at Katherine Anne Porter (1960)," *Katherine Anne Porter: A Critical Symposium*, p. 89. ジョーンソンがこのテーマに属する作品として挙げているのは "Noon Wine", "María Concepción", "He", "The Jilting of Granny Weatherall" と "Magic" である。
- (15) "Maic" は、ポーターがニューオーリンズの Basin Street で働いていた黒人メイドから聞いた話に基づいている (Joan Givner, *Katherine Anne Porter: A Life* (New York: Simon and Schuster, 1982), p. 197)。
- (16) Percy Lubbock, *The Craft of Fiction* (1921) (London: Jonathan Cape, 1957), pp. 251-252.
- (17) Henry James, "Preface to *The Ambassadors*," *The Art of the Novel*, p. 321.
- (18) Cf. George Hendrick, *op. cit.*, p. 94. 大方のこの見方に対して、既成の制度が 'magic' であるとみる Jane Krause DeMouy は、ニネットとマダム・ブランチャードが、それぞれ搾取と結婚という制度により縛られている女性として同類であると述べた (*Katherine Anne Porter's Woman: The Eye of her Fiction*, 1983, p. 40)。リースはドゥムイと同じ立場から、語り手と売春宿の料理女、マダム・ブランチャードとニネットとの間に対応関係を見ている (料理女がニネットを「支配」しようとしたように語り手はマダム・ブランチャードを "subjugate" しようとしている)。後者の対応は、固有名詞を与えられている者同志の間にみられるものであるという彼女の指摘は納

得させるものを持っている (*op. cit.*, pp. 53-54)。

- (19) ハーディは前記の書物(註(11)参照)において語り手が黒人である点を重視した作品解釈を試みている。この視点は従来の解釈にはみられなかったものである。
- (20) ポーターの作品のテーマの一つとして、使用人である黒人が白人の主人に及ぼす影響を挙げるハーディは、語り手と女主人の関係について洞察力鋭い分析を施している。彼によれば、この繰り返しは“the servant's subtly malicious intent in telling the anecdote”を明確にするのに重要である (*Hardy, op. cit.*, p. 43)。
- (21) *Ibid.*
- (22) 売春宿を意味する ‘fancy house’ のここでの用法は皮肉である。
- (23) 語り手の性格については、彼女が料理女について説明する箇所に暗示されている。“For the cook in that place was a woman, colored like myself, like myself with much French blood just the same, like myself living always among people who worked spells. But she had a very hard heart, she helped the madam in everything, she liked to watch all that happened, and she gave away tales on the girls.” (41) 後述するように語り手の言葉は両義的であり、従ってその性格は料理女同様、残酷などがある。しかし、筆者の考えは、語り手と料理女との間の生まれと性格の類似は両者の対応関係に直結するものではないということである。むしろ語り手は一方において哀れなニネットであり、同時に他方において底意地の悪い料理女でもあるのである。
- (24) 洗濯婦に対する女主人の小言は、魔法の効力を信じての発言であるか否かは断定できない。彼女が示す二回目の反応は、ニネットにかけられた魔法の効力についての興味を示すものであることを考えれば、彼女がそれを信じていたとは思われない。重要なことは、魔法に対する彼女の不快感を語り手が見て取ったことである。
- (25) Willene Hendrick and George Hendrick, *Katherine Anne Porter* (rev. ed.; Boston: Twayne Publishers, 1988), p. 74.
- (26) *Katherine Anne Porter* (1st ed.) p. 93.
- (27) Cf. Givner, *op. cit.*, p. 197; Yosha, *op. cit.*, p. 140.
- (28) Hendrick, *Katherine Anne Porter* (1st ed.) p. 94.
- (29) Cf. Yosha, *op. cit.*, p. 139.
- (30) Hendrick, *Katherine Anne Porter* (1st ed.) p. 93. (参照: ‘Blancard’

〈OED〉)

- (31) ポーターの作品の中で黒人使用人が登場する“The Journey”, “The Last Leaf”, そして“The Circus”についてハーディは“Implicit in these stories is a trenchant criticism of Southern white paternalism...”と述べている (Hardy, *op. cit.*, p. 40)。
- (32) ロベスの解釈 (*Conversations with Katherine Anne Porter: Refugee from Indian Creek*, p. 128) のように、語り手が“simple and naive”で、彼女の語る話の皮肉な意味にも気付かないとすれば、彼女は単なる饒舌家に墮してしまふ。そうだとするとこの作品は、語り手とその話との間に何の有機の関係もない、話自体の特殊性で読者の興味を惹こうとするものになり、従って聞き手であるマダム存在の意味も軽少なものになってしまう。またナンスは、語り手の“detachment of the glib, callous narration”と、聞き手の「同じ無感覚な好奇心」がニネットの置かれている状況の恐ろしさを描き出すのに貢献しているとしている (*Katherine Anne Porter: The Art of Rejection*, pp. 15-16) が、L. Yosha は、ポーターの関心はニネットの話そのものにはないと指摘した上で、ニネットの状態に対する語り手と女主人の“sadistic pleasure”——人間社会における破壊的要素の芽としての——を問題にしている (*The World of Katherine Anne Porter*, pp. 137-141)。このように、語り手の態度については多様な解釈が行なわれているが、彼女の語り口の分析は、この語り手が自らの話にもっと積極的にかかわっていることを明らかにしてくれる。
- (33) Jan Pinkerton は、ポーターの所謂ミランダものを集めた“The Old Order”における白人と黒人の関係についての議論がなされてこなかったことを指摘したエッセイ“Katherine Anne Porter’s Portrayal of Black Resentment”において、過去において受けた不当な取り扱いに対して黒人が白人に求める代償は、社会の秩序を乱すことはないが少なくとも“mental satisfaction to the man who is fully aware, beyond most white understanding at that time, that he has been and remains the victim of injustice”を与えてくれる、と述べている (*University Review*, 36 (Summer 1970), 315)。ピンカートンは“Magic”について言及はしていないが、黒人の抗議としてこれも同じタイプのものといえる。
- (34) このことについてハーディは次のように述べている。“... possibly because she... was raised in a way that prevented her from knowing any Negroes during her formative years except on terms dictated by the

語り手の魔法（武田）

system of social caste, Miss Porter never attempted a full-scale characterization of a black who is interesting primarily in his or her own right." (Hardy, *op. cit.*, p. 40.)

(35) Givner, *op. cit.*, p. 73.

(36) "The Last Leaf," *The Collected Stories of Katherine Anne Porter*, p. 349.

(37) "The Circus," *The Collected Stories of Katherine Anne Porter*, p. 348.

(38) Hardy, *op. cit.* p. 40.

(39) *Ibid.*, p. 41.

(40) ギヴナーは "The Jilting of Granny Weatherall" と "Magic" に関して "...she was finding her own subject matter and establishing some control over it." と評価している (Givner, *op. cit.*, p. 197)。

(英米文学科 教授)